

## 図書館紀要の編集二〇年

松下眞也

「早稲田大学図書館紀要」の編集に私が関わるようになったのは、平成元年（一九八九）のことであった。当時は、間近に迫った新中央図書館の開館に向けて、なにかと気ぜわしかった時期で、ほかに多くの担当業務や検討事項をかえ、紀要の編集に割ける時間は多くなかった。

それまで、私が図書館紀要に対してもっていたイメージは、執筆する人がほぼ固定しており、そのため肝心の図書館員にあまり読まれていない、というものだった。すでに創刊されて三〇年、通号三〇号を数えていたが、掲載内容も翻刻などの資料紹介が多く、図書館学や書誌学などの論考・論文は少なく目立たなかった。むろん翻刻や資料紹介の比重が大きくなるのは、多くの貴重な未刊の古文獻をかかえる早稲田大学図書館としては当然のことであるし、それらを掲載することは意義のあることではあるのだが、さらに、もう少し幅をひろげた内容にすべきではないかと常々感じていた。

おりしも当時の図書館長であった奥島孝康先生は私たちに、それまで年一冊の刊行であった図書館紀要を年二冊の刊行とすること、そのうち一回は特集を組んで、多くの新しい執筆者を開拓するよう指示された。

「特集」とは、あるテーマに基づいて、複数の執筆者から原稿を集め掲載することであり、場合によってはこちらで執筆者を選定し、原稿を依頼するということも含み、編集の比重も責任も重くなるが、図書館紀要の従来からのイ

メージを変え、内容を充実させるには、よい方法である。同時に、その時々図書館界における最もホットな問題を取りあげれば、早稲田大学図書館内外だけでなく、ひろく図書館界全体に話題を提供することもできる。

それを受けて私たち図書館紀要編集委員会では、一九九〇年三月の日付で刊行された図書館紀要第三二号において、最初の特集「図書館における資料保存」を企画した。そのころ、アメリカに端を発したいわゆる「酸性紙問題」を中心とする紙資料の劣化と保存に関する問題は、ひとり図書館界にとどまらず、出版界をも巻き込む大きな社会問題ともなっていたからである。三二号では、誌面の一部を特集にするのではなく、一冊まるまる特集号とした。それだけ原稿が集まったということでもある。

特集号の大きな特徴は、それまで、ほぼ早稲田大学教職員（OB含む）のみで占められていた執筆陣を、依頼原稿という形で、一気に学外の方までに拡大したことである。資料保存問題の特集号では、宮内庁書陵部の森縣氏、天理図書館の大内田貞郎氏、オクスフォード大学ボドリアン図書館のイズミ・K・タイトラー氏をはじめ、延べ一二名の学外執筆者の原稿をいただくことができ、その時点としては、かなり充実した内容となった。もとより十分なものではないが、この問題の震源地であるアメリカからも、日本における対策の中心である国立国会図書館や日本図書館協会の資料保存委員会などからも、あえて寄稿を求めず、貴重な資料を有する各図書館の現場担当者からの原稿を集めることに努めた。また、酸性紙問題だけでなく、東洋の図書館に特有の虫菌害問題についてとりあげたことも、一つの見識を示し得たと思っている。外部の執筆者に対する謝礼の制度も、もとより薄謝ではあるが、そのとき整備した。

外部から原稿を集めるだけでなく、図書館内部でも、この特集に合わせて「資料劣化度調査」を二〇名以上の館員の協力を得て実施し、その調査結果を紀要に掲載した。紀要の企画に対して、それほど多くの館員が参加したのは、

それまでにないことで意義があったと思う。調査は図書館の蔵書の酸性劣化の進行度合を官能法（手でさわって判定する）によって評価するもので、科学的方法論として必ずしも確立したものとはいいがたく、またサンプル調査ではあったが、そこでの結果として得られた早稲田大学図書館における資料の酸性劣化度（資料全体に占める Brittle の割合）が、アメリカ議会図書館などで公表されている数字にくらべきわめて低く、酸性化の進行がさほどでもないことを示したのも、内外に少なからぬ影響を与えたのではないかと考えている。

現在の時点から見れば、ニコルソン・ベイカーのいうように、いわゆる「資料保存運動」自体が資料の保存をさまたげたということも、歴史的事実として否めない。当時、最良の解決策とされた「マイクロ化」のために、多くの本の原本や新聞原紙が撮影の過程でバラバラにされ、また撮影された原本・原紙のかかなりの部分が、撮影後廃棄されるという運命をたどったからである。

その後も三四号（一九九二年三月）で「特集 大学図書館員論 現状と展望」、三七号（一九九二年十二月）においては、新中央図書館開館一周年を記念して「特集 早稲田大学新中央図書館」、さらに四一号（一九九五年三月）では、「おらんだ正月二〇〇年」にちなみ「洋学特集」を組んでいるが、「年二回刊行のうち一回は特集号」という原則は守られず、特集のテーマ設定にかなり苦慮することになった。結局、四五号（一九九八年）からは、従前通り年一回刊行にもどおり、特集を組むこともやめてしまったが、何度かの特集号の試みにより外部の人に執筆を依頼し掲載したことは、意味のないことではなかったと思っている。

どのような雑誌も、それを出している母体の組織の内部のみで完結するべきものではないことは自明の理であり、つねに外部からの異なった風を入れていかなければ、いずれマンネリズムに陥り、立ちゆかなくなる。「同人雑誌」と呼ばれるものの多くが二号、三号で終わらざるを得ないのはそのためだ。まして、図書館というものをとりまく状

況は、この時期とくに、きわめてドラスティックな変革に揺れていたのだから。

図書館紀要は、館内に「図書館紀要編集委員会」というものを設け、そこで編集を行うことになっていたが、委員は任期二年（三年の人もいたが）で次々と代わるのに、委員長は、全然、交代が許されず、気がつくとは私はまる二〇年近くも紀要編集に関わり続けることとなった。

長い間、編集担当責任者が変わらなかったことが、紀要にとってよいことだったのか悪いことだったのかはわからない。組織という観点からは、あまり健康なことではなかったと思っている。というのも、特定個人があまり長く編集を担当していると、好むと好まざるにかかわらず、編集方針に個人の考えが色濃く出てしまうからである。しかし編集というものが、単にマニユアル通りにやればすむという性質のものでもない以上、それもやむをえぬことであるのだが。

雑誌編集という点から見ると、どちらかというと私は保守的であって、あまり大きな変革は好まなかったが、それまでの紀要が、表紙からしてどうにも「暗い」ということは気になっていた。表紙だけでも明るく、コントラストのある、できればインパクトのあるものにしようといういろいろ考えた。新中央図書館の開館以降しばらくは、その正面入口（カトーの警句）の写真を使ったが、やがて毎号、館蔵のさまざまな資料写真を使うことを思いついた。とくに四九号（二〇〇二年三月）の竹久夢二の「落花」、五〇号（二〇〇三年三月）の洋学文庫の中の「モルモット之図」、五二号（二〇〇五年三月）に用いた「屁合戦絵巻」（一名勝絵）などは、これまであまり紹介されておらず、秀逸ではなかったかと思っている。

これらの図柄は、いずれもその年度に実施した館蔵資料による展覧会に出品したものの中から選んだものである。タイトルと目次だけの味気ない多くの学術雑誌の表紙にくらべれば、すくなくとも手にとってみる気は起きるのでは

ないか。まずは外形からでも変えていくのが重要ではないかと思った。

図書館紀要には、早稲田大学図書館の広報誌という側面もある。ことに、当該年度に図書館主催で行われたイベント、展覧会やシンポジウム、講演会などの記録はぜひ掲載されるべきであろう。私は展示も担当することが多かったので、その年度に行われた展覧会の報告はおおむね紀要に載せている。

一般に出版における「編集者」の役割は、①企画・デザイン、②原稿依頼・受領、③原稿整理・用語統一、④指定・レイアウト、⑤校正、といったところであろう。早稲田大学図書館紀要は二二号以降、印刷所への送達を含む③から⑤までの編集実務を、外部の某ベテラン編集者に委託していた。従って紀要編集委員会の仕事は、①②と⑤の一部、すなわち企画立案と原稿依頼・受領、著者校正の送達などに限られるわけであるが、図書館紀要の場合、特集を企画し原稿をしかるべき執筆候補者にこちらから依頼する以外は、ほとんどが館内公募しての投稿原稿であるので、企画段階でその原稿の採否を決定するという重要な仕事があった。これがなかなか神経をつかい、ストレスの原因ともなった。

世のいわゆる学術雑誌と称されるものの編集体制は、多くはこの編集委員会方式となっており、投稿されてきた原稿を編集委員がそれぞれ査読して、掲載の可否を討論し決定している。この方式は公正のようにも見えるが、無責任体制にもなりかねない弱点をもっている。私は一時、国公私大協力委員会を出している「大学図書館研究」という雑誌の編集委員会に入っていたことがあるが、そのころは慢性的に投稿原稿の数が少なかったせいもあって、投稿されたものはよほどおかしな内容でないかぎり採用されるのが常であった。編集委員からは、せいぜい細かい用語について修正を求める意見が出るか出ないかで、編集委員会も委員の査読そのものも、いつてみればお座なりで、形骸化していると感じた。

当然そのような委員会の席では、たとえば、「この論文は全然だめだ。この人は何もわかってない。こんなものを載せたら見識が疑われる」というような過激な意見など出ないし、たとえ個人的にはそう思っている、なかなか言わないものだ。編集委員などといっても、その仕事に専従できるわけでもなく、多くの人が無理に押しつけられて、断りきれずにやっている場合がほとんどであるからだ。

もっとも私が委員をやっている間に、「大学図書館研究」編集委員会は、当時流行していた「自己点検」の影響か、年二回の刊行を年三回にふやしたり、こまかい査読規定を定めたりという大きな変革に乗り出すのだが、それについて述べるのは本稿の趣旨ではない。

早稲田大学図書館紀要の編集委員会もその例にもれず、掲載を「否」としたものは、二〇年間のうち数えるほどしかない。「ボツ」にしたものには、それぞれ個々に無理からぬ理由があるのだが、執筆者にはなかなか納得していただけなかった。

編集実務は外注してはいたが、私は、提出された原稿には努めて目を通し、誤字脱字、衍字（えんじ）、用語の不統一や不適切な表現、明白な事実誤認や意味のわかりにくい文章などについてチェックし、原稿あるいは初校の段階で著者に連絡して、修正、書き直しを求めるようにしていた。

これは編集者としては当然のことである。しかし越権行為と受け取る著者もいた。著者は、自分の名前でその文章を発表するわけであるから、明白な誤字・脱字ならともかくも、文章が難解であるとか論理的整合性がないとかいうのは、著者の負うべき責任であって、大きなお世話というものである。さらにいえば、これは著作権にも抵触する可能性もある微妙な問題であるともいえる。しかし、紀要に載せる論文は文学作品ではないのだから、できれば、だれが読んでも同じ意味として通じる、平明な論旨の通った文章であるに越したことはない。

そのような考えから、私は、何人かの著者に対して、非礼を承知の上で文章上の難点・疑問点を指摘し、できれば修正していただけないかと依頼した。

こういう指摘を受けると、たいいていの著者は驚き、つぎには不快の念を示す。誰しも自分の書いた文章に絶対の自信を抱いているというわけでもあるまいが、過誤や難点を指摘されるのは、よい気持はしないであろう。とくに、原稿のコピーや初校のコピーに朱を入れたものを示されると、なにか添削されているようで面白くない。私も著者の立場でそのような指摘を受け取ることがあるが、感じの良いものではない。

しかしそんな内心を見せず、素直に書き直しにに応じてくれる著者もいれば、オレの原稿に何すんだと怒り出す人もいる。とくに、私は、紀要の特集のために、わざわざこちらから依頼して書いてもらった早稲田大学以外の本属である先生方の原稿に対しても、容赦なくこれを行ったため、かなりの顰蹙を買うことになった。

「君は古いタイプの編集者みたいだ」と、ある先生は私に言った。

編集者には「よい編集者」と「悪い編集者」がいるだけであり、古いタイプと新しいタイプがあるとは初耳だが、要するに彼の言いたいことは、むかしの大出版社などにいた権威主義的で小姑のようにうるさい編集者のイメージだというのだろう。むしろ光栄だ。こちらは、主語と述語が入り乱れてこれでは何を言いたいのか全然わからないということを指摘しているだけなのに。

論述内容の妥当性やその人の開陳している意見の是非については、読者に委ねるばかりだが、その前に、意味を伝えるべき文章がどう読んでも意味をなさないというのでは始まらないではないか。研究者の中には、好んで晦渋な文体を弄する者がいるが、意味のよく通らぬ論文というものはありえない。彼ら自身、卒業論文などの指導では、学生たちにそのように言っているのではないか。

むずかしいことをやさしく書くのは至難の技だが、むずかしいことをよくわからぬように書いてあるのが大半であるのが現実だ。

また別の私立大学教授は、私の「書き直し要請」の手紙を一見するなり電話してきた。「書いてくれとそっちが頼むから書いたのにこれは何だ。失礼だろう」と怒気を含んだ声で言う。お怒りもごもつとも私は彼に對して、朱を入れた部分がどうしておかしいのかを、噛んでふくめるように説明した。これもかなりエネルギーを要することである。私の説明をきいているうちに、電話口のむこうの声はだんだん元気がなくなり、最後には、「わかった、わかった、書き直すよ」と言って電話は切れたが、その後、書き直しの原稿が私に届くことはなかった。結果としてはボツにしたと同じことになった。

さらに別の某大学の先生は、私が赤をたくさん入れて送った原稿のコピーをにぎりしめて、私の職場までたずねてきた。例によって私が、この言葉はどこにかかるのが曖昧です、ここに同じ論旨の繰り返しがあります…などと説明をはじめると、彼はそれをさえぎり、「わかった。もう早稲田の紀要には書かない」と言って席を立った。

のちに、その先生の在籍する大学のある学部の研究紀要に、その原稿がそのまま掲載されていた。あの研究紀要はおそらくいっさいの査読なしで刊行されているにちがいない。

四五号（一九九八年三月）の図書館紀要の「編集後記」に、私はつぎのように書いている。

：図書館紀要にかぎらず、一般に大学の出す「紀要」の多くは、いろいろな意味で厄介物になりつつある。寄贈されてきたものを無下に廃棄もできず、製本してとっておくうちに、そのほとんどはさしたる利用もないまま、書架のあまりにも多くの空間をいつしか占有してしまう。…（中略）…自戒をこめて言うのであるが、いわゆる紀要類のな

かには、編集がじつに甘いものが多くみられる。ほとんど、編集作業などなされていないのではないかとと思われるような、雑なつくりのものがしばしばみられる。これが現実である。掲載論文のレベルもさまざまで、きちんと査読がされているとは思えぬ場合もある。そういうものの堆積が、いつしか図書館の書架に積み上がり、身動きかなわぬ状態にさせてしまうのは、まことに理不尽な光景といつてよい。(後略)

紀要編集二〇年の間には、さまざまな経験をした。「聞き書き」をとり、そこから起こして掲載したなどというのもそのひとつである。

二〇〇〇年の春ころだったと思うが、早稲田出身の在野の精神分析学者、故大槻憲二氏の未亡人、大槻岐美さんに、戦前、本郷動坂に大槻氏が精神分析研究所を開いていたところ、交流のあった作家たちについて語っていただいたことがある。宗像和重教授(現図書館副館長)を聞き手に、ビデオを撮った。これは、その前年に、大槻さんが所蔵しているフロイトの自筆書簡を譲っていたこうと兼築信行教授(当時副館長)とともに那須のお宅を訪れた際、老刀自の話があまりに面白いので、日をかえてインタビューに来ようと話し合っていたのが実現したものであった。そのインタビューの詳細は、四八号(二〇〇一年三月)に掲載されているが、実はこのときの録画されたビデオテープからそれを文字起こす作業をしたのは私である。

一般に「テープ起こし」といわれているこの作業はとても時間がかかり、聞き取れない部分やよくわからない単語や固有名詞がまじるので大変だが、それを推定するのもクイズを解くような楽しみがあり、面白いものである。むしろ、話そのものに関心がなければテープ起こしも苦役にすぎないが、この場合は大変興味があったので行った。テープ起こしですというのは編集業務からはるかに逸脱しているとも思われるが、ふだんの紀要にはみられぬ興味深

い記事になったのではないだろうか。このような場合、録画そのものをデジタル・コンテンツとするよりも、文字にした方が圧倒的に読まれるし、おばあさんの話が伝わってゆくのである。紙と文字の威力も捨てたものではない。

テープ起こしとしては、四四号（一九九七年三月）に掲載した、故・本間曉氏の『早稲田大学図書館と海外図書館との協力について』も、私がビデオ撮影・録画し、私が起こしたものである。その原稿は、その前年の秋、ドイツのヴュルツブルクで開催されたE A J R S総会における本間氏の講演だが、氏は、言葉と言葉の間に「うー」とか、「あー」「えーと」などの、意味のない長いポーズをはさむ癖があり、はじめに起こしたときは、その意味のない間投詞も、むろんあまさずマニアックにすべて記録してあった。テープ起こしの醍醐味は意外にそんなところにある。著者（講演者）校正によって、その、大量の「あー」「うー」がすべて削られてできたのが、四四号の掲載原稿である。

紀要の編集をひきついだころは原稿はすべて手書き、印刷も活版印刷から電算写植になるかならないかぐらいであったが、これも、二〇年という歳月を閲するうちに劇的に変わった。著者の原稿は、現在はファイルを添付してメールで送達するのが普通であるし、印刷も完璧にDTP（デスクトップ・パブリッシング）になっている。

数年前、私は、「日仏図書館情報学会」の学会誌「日仏図書館情報研究」の編集を、二年だけひとりで引き受けていたことがあったが、編集といっても、原稿はすべてメールで到着し、それを順番を決めて印刷会社でメールで送付するということだけのこと、校正もPDFファイルが送られてきて、それをメールでまた返すという方法であり、すべてPCの中で完結してしまうようになっていた。

便利になったものだと思うが、そうした方法では、肝心の原稿、論文の内容がともすれば忘れられ、不問に付され、ブラックボックスと化してしまう危険性が増大する。たとえば、著者が最初に原稿作成の段階で気づかずに残ってしまった変換ミスが、結局発見されぬまま印刷されてしまうということが、昨今の印刷物には、あまりにも多く見受け

られるのである。

校正家の野村保恵氏が、象徴的な標題の著書『誤記ブリぞろぞろ』（二〇〇五、日本エディタースクール出版部）の中でつぎのように書いている。

コンピュータが発達すれば「校正」は不要になるとの意見も聞きます。それはないでしょう。コンピュータが何でもやってくれるわけではなく、必ず人間がその中間で作業をします。最初のデータは人間が入力します。その誤りはコンピュータには発見できません：（後略）

そして野村氏は、DTP時代になってから、「組版」のルールがまったく乱れ、なんでもありの不統一なものになってきたと指摘し、校正の「素読み」がきちんとできる編集者が極端に減ったと嘆くのである。そのため現今の出版物には、とても考えられぬような「誤記ブリ」がぞろぞろというわけだ。笑い事でなく日本語の危機といつてよい。

たしかに印刷も校正も様変わりしてたいへん乱れていることは事実だ。インターネットには誤字・誤用、事実と異なるあやしげな情報が満載である。正しい編集のフィルターを通さないからそうなるのだ。編集とは地味な作業だが、機械的にできるものではなく、こうすれば万全という王道もない。正確な知識を得る方法を知っていること、どのような原稿にも臨機に対応できる柔軟さが、ぜひ必要である。

創刊五〇年となった早稲田大学図書館紀要が堅実な編集体制を堅持して、今後も刊行を続けてゆくことを望みたい。

（まつした しんや 古典籍データベース化推進プロジェクト室）